

化学療法に誘導される閉経と臨床的意義

前述のように、抗癌剤は卵巣に直接障害を与え、無月経を生じます。また、成熟卵胞よりも未成熟卵胞の方が障害を受けにくいとされております。化学療法により誘導される閉経(化学閉経)の定義としては、半年以上月経がない場合とすることが提唱されています。化学療法中に無月経になったとしても、化学療法終了後に月経が再開する場合があります、一過性の無月経と化学閉経とは区別されます。

化学閉経の頻度は、報告により閉経の定義が異なることもあり、約 40-80%とばらつきがみられます。閉経を誘導する因子としては、年齢と投与量が挙げられ、年齢が高い人や投与量(回数)の多い人に閉経が起こりやすいと言われています。また、無月経となるまでに起こった月経の回数が多いほど無月経になりにくいとも言われております。

化学閉経は、不妊・更年期障害など引き起こしますが、予後は良好になると言われております。近年では、化学療法による影響から卵巣機能を保護する目的で LH-RH アナログを併用する試みがなされております。